

ラグビーワールドカップ2019福岡開催を終えて

ラグビーワールドカップ2019福岡開催推進委員会

事務局長 篠原 一洋

1 大会に至る経緯

「ラグビーワールドカップの試合会場を福岡に誘致しよう！」

その声は、民間から上がった。

その民意に動かされ、ここ福岡からは福岡市（博多の森球技場）、北九州市（ミクニワールドスタジアム）が検討を開始。

ラグビーワールドカップ2019大会組織委員会が提示するスタジアムの規模等の条件から北九州市は試合会場誘致を断念し、キャンプ地誘致に専念。その結果、県内からは福岡市のみの立候補となり2015年3月、福岡市が国内12会場の一つに決定した。

「福岡はラグビー処」。福岡が選ばれるのは当然と思われがちだが、実際は当落線上にあったといわれる。その理由の一つはスタジアムの収容人数の規模。当初、試合会場は10～12会場とされており、もし10会場で実施することになっていたら福岡開催はなかったかもしれない。

そのような状況の中での福岡開催の決定は、関係者にとってまさに歓喜の瞬間であった。

開催決定後、大会を成功に導くために福岡県商工会議所連合会会長をトップとし、官民一体となった組織、「ラグビーワールドカップ2019福岡開催推進委員会」を2015年8月に設置。

2017年からは事務局組織を独立させ、大会の準備に取り組んできた。

2 大会の目標（成功の姿）

我々は、大会の成功の姿として6つの目標を掲げた。

- ①会場を満員の観客で埋めること
- ②前回大会同様、素晴らしい試合が行われること
- ③福岡の街全体がラグビーで盛り上がること
- ④福岡をはじめ、九州、そしてアジアのラグビーが普及すること
- ⑤大規模国際大会のノウハウが培われること
- ⑥海外観光客のリピーターが増加すること

結果は、福岡で行われた3試合すべてほぼ満員の観客で埋まり、合計約5万3千人が来場。試合も世界最高峰のラグビーと呼ぶにふさわしい素晴らしい内容であった。観客輸送も滞ることなく、スムーズに運営することができた。また、JR博多駅前で開催したファンゾーン、県内各地で実施したパブリックビューイングにも国内外から大勢の観客が訪れ、その数は6万4千人を越え、

2015.03 福岡開催地決定



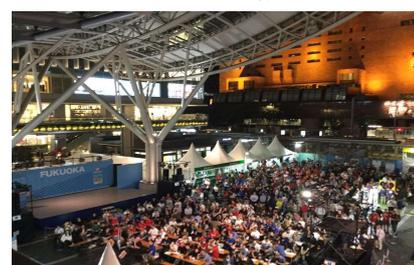
写真提供：大会事務局

熱戦を間近で観戦



写真提供：大会事務局

ファンゾーンの様子



撮影 筆者



写真提供：大会事務局

大変な賑わいをみせた。また、県内で行われた事前キャンプでも、それぞれの自治体とチームの間で交流が行われ、特に北九州市とウェールズの間では両国の新聞に感謝の気持ちを掲載し合うなど、親密な友好関係が築かれた。

そして、ラグビーの普及に関しては、県内ほとんどの小学校でタグラグビー教室を実施。さらに、アジアの玄関口である福岡だからこそ、アジアにおけるラグビーの普及に率先して取り組むべく「アジアラグビー交流フェスタ」を2018年から実施。

2回目となる2019年大会には、海外から7カ国8チーム（マレーシア、台湾、ネパール、タイ、バングラディッシュ、マカオ、インドネシア）が参加し、福岡、大分、長崎、鹿児島との交流試合を行った。

大規模国際大会のノウハウについては、これまでも福岡は数々の国際スポーツ大会を開催してきた実績があるが、今回の大会で特筆すべきはボランティア。

福岡では700名程度の定員に対して1,000名を超える応募があり、その熱意と行動力、特にそのおもてなしは国内外の観戦者から高い評価を受けた。

これは、今後の国際大会の誘致においても大きな力となるものと考えられる。

海外からの観戦客のリピーターを増やすことについては、もう少し時間を経してみないとわからないが、訪れた方には、「福岡」という街の魅力を知っていただけたのではないかと信じている。

大会期間中我々を最も悩ませたのは、何と言っても「台風」であった。毎週といってよいほど立て続けの襲来に試合開催そのものが危ぶまれ、ファンゾーンやその他掲示物、造作物の撤去をどのタイミングで判断するか、本当に苦慮した。

結果、福岡では試合はすべて行うことができた。

ファンゾーンは、当初12日間から4日間は中止とせざるをえず8日間となったが、総じて、福岡開催は成功であったと考える。

アジアラグビー交流フェスタ



写真提供：大会事務局

大会を支えたボランティアの皆さん



撮影：筆者

市民を中心に大会支援を行ったラグビー フューチャーセッションの取り組み 大会活性化ミーティング



博多どんたく港まつりパレード参加



博多駅前での博多灯明ウォッチング



撮影：筆者

3 大会を終えて

今回のラグビーワールドカップ日本大会。ここまで日本中が盛り上がることを想像していた人は少ないのではないかな。

これには大会組織委員会、また各開催地における入念な準備があったことはいうまでもないし、加えて日本代表の大活躍が拍車をかけたことは疑う余地もない。

今大会に多くの人が期待したこと。それはやはりインバウンドによる経済波及効果であろう。特に九州では、全国の12開催都市のうち3つがあり、試合数も大分での準々決勝2試合を含め10試合あり、チケット販売総数も約32万枚であり、海外からの観戦客が3割としても約10万人近くが訪れる計算となる。

これまで少なかった欧米豪からのインバウンド増加を図るきっかけになると多くの関係者が期待していたのはいうまでもない。

また、ラグビーワールドカップは開催期間が長く、試合の間は地域の周遊観光も期待されていたことから、開催都市以外の周辺地域でもその期待は大きかった。

特に、フランスは、福岡、熊本、そして勝ち進めば大分でも試合が開催されるとあって、九州各県の自治体、経済界からなる九州地域戦略会議はパリでプロモーション活動も行った。

大会期間中、欧米豪から多くの観戦客が九州を訪れ、また、開催都市以外の地域にも少なからず観戦客が周遊したとの話も聞いており、これらのプロモーション活動の一定の成果があったものと考えられる。

4 今後に向けて

今回のワールドカップでは、ボランティアを含めた日本人のおもてなしに対し、海外から高い評価を受けた。ここ福岡でも献身的、かつ笑顔あふれた対応は、海外からの観戦客に好印象を与えた。その一方で、欧米豪向けの多言語サインの充実、キャッシュカード決済への対応、ベジタリアン等食の多様性への対応など受け入れ体制が十分であったかということも検証すべきである。しかし、見方を変えたと、実際に様々なシーンにおいて欧米豪から多くの観戦客を受け入れた経験は、民間レベルも含めた受入れ体制の大きな転機となるのではないかな。このことは貴重な財産といえるだろう。

今回の大会が我々に残してくれたもの。それはなんといってもラグビーそのものの魅力。一人ひとりが力を出し合い、身を挺して見方にボールをつなぎ、全員で勝利を目指すことの素晴らしさ、特に日本代表がそうであったように多様な国籍のメンバーが「ONE TEAM」となれることを示したことではないかな。

今回の大会で「にわかラグビーファン」が増えた。今後、関係者が一丸となって、このムーブメントを一過性のものに終わらせることがないように取り組んでいくことこそ、今大会のレガシーになると考える。

観戦目的に福岡から熊本に新幹線で移動する
イングランドからの観戦客



撮影：筆者

□プロフィール

福岡県出身。広島大学教育学部卒。

福岡県立高校の保健体育科教員として13年勤務ののち、教育行政、スポーツ行政に長年携わり、2017年4月から現在の職に就く。

ラグビーは、高校時代、大学時代に授業で経験した程度だが、大好きなスポーツの一つ。

取材に対応する篠原事務局長



取材：2019.11.28（木）
場所：RWC福岡事務所

＝編集後記＝

篠原事務局長にインタビュー、コラムをお願いして、スポーツ・ラグビーの力を改めて感じた。

「スポーツが人の心を動かす」まさにそれを実践され、我々観客・住民側はそれを実感できた。

「4年に一度ではなく一生に一度」今大会を表現したキャッチコピーではあったが、今年度末で事務局長を退任される篠原事務局長にとっては、まさに「一生に一度」の大任であり、まさに「余人を以って代えがたし」の適材適所であった。彼なくして今大会の運営・成功は無かったと断言できる。そして今後の大会後のレガシーは私を含むすべての関係者の役目であると強く感じる。

取材・制作・撮影

KSTA 杉島 戸渡